

翟学偉著 朱安新・小嶋華津子編訳

現代中国の社会と行動原理

〈岩波書店、二〇一九年九月、三三三頁〉

中国人による中国（人）研究は、本書の著者も度々言及しているように早年欧米に出ていた社会学者によるものがほとんどであった。西洋の哲学や社会科学理論に触発され外から観た「吾国吾民」を論ずるそれらの著作は中国人論の古典として知られている。一方、現代の中国社会を生きる中国人の行動原理についての中国人研究者の論考はあまり日本に紹介されていない。それだけに、現代中国社会に根ざした中国人研究者による中国研究である本書の日本語訳の出版は意義が大きい。期せずして本特集号で紹介するグッド・タイミングを得た。

中国人の社会的相互行為に観察される様々な事象を欧米の社会科学の理論や概念を用いて説明することに限界を感じ、自らの研究視座と理論的枠組み

を構築しようとする著者は、「本土研究」に立脚し、「関係」「人情」「面子」「権力」をキーワードに現代中国社会を分析しその本質を解いていく。その手法に社会学でよく用いられる定量研究でもフィールド・ワークでもなく、

一生活者として観察される身辺の出来事、マスコミで取り上げられた一般性を有する事例、よく知られる文学作品や故事など、それらを読者と共有する「叙事的」な方法を用い、既成の理論に当てはめるのではなく、「網羅的且つランダムな帰納原理」に基づく分析を取り入れ、仔細に論考を展開していく。

本書の基になるのは一冊の本ではなく、編訳者によって著者の数多くの研究の中から「人情、面子と権力の再生産」、「中国人の関係原理」の二冊の一部を選んで再編集された。海外における長期の研究期間こそ持たないが、ここ二十数年の間に中国に紹介された西洋の文献に原書も加わり国内外の多くの文献を読み込んできたことは本書を読んで分かる。一方、中国文化の根源

である儒家の思想と数千年の長きにわたって形成された農耕文化に目を向け現代の中国社会の営みのメカニズムを求めようとするのも、著者のしつかりした史学の素養と歴史観に裏打ちされた知見によるものと言えよう。

日常にまつわる様々な現象を、簡にして要を得た慣用語や諺、警句、格言などによって語られる中国人の処世の知恵とも言える多くの言説も挙げている。それらを中国社会という文脈に置いて理解せねばならないことは言うまでもない。一方、日本語にも少なからず存在するものもあり、読者の共感を誘うことを想像しながら読み進むにつれ、もし著者が日本語というチャネルも持っていたら、どんな展開を見せていただろうという気もした。

本書に収録された論考は今日の中国を理解するうえでも説得力があることを著者の翟氏は確信している。本号掲載の講演と論説も合わせて読むと理解がさらに深まるだろう。そう願いたい。

（薛鳴）